

Ⓜ

賢所祭神考証

013902-000-2

6-192

賢所祭神考証

田中 頼庸 / 著

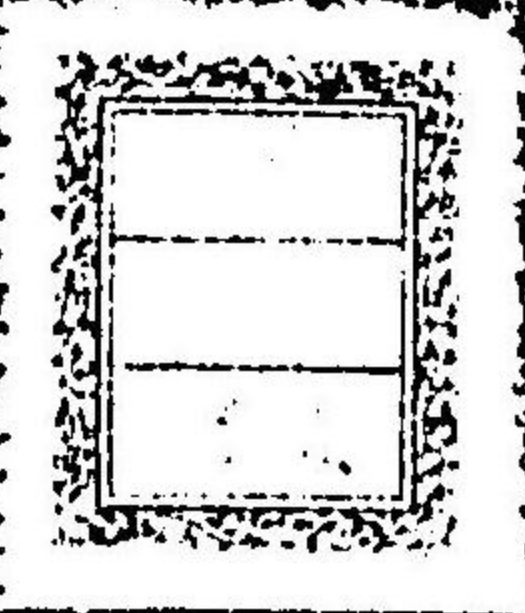
M14

ABB-0127

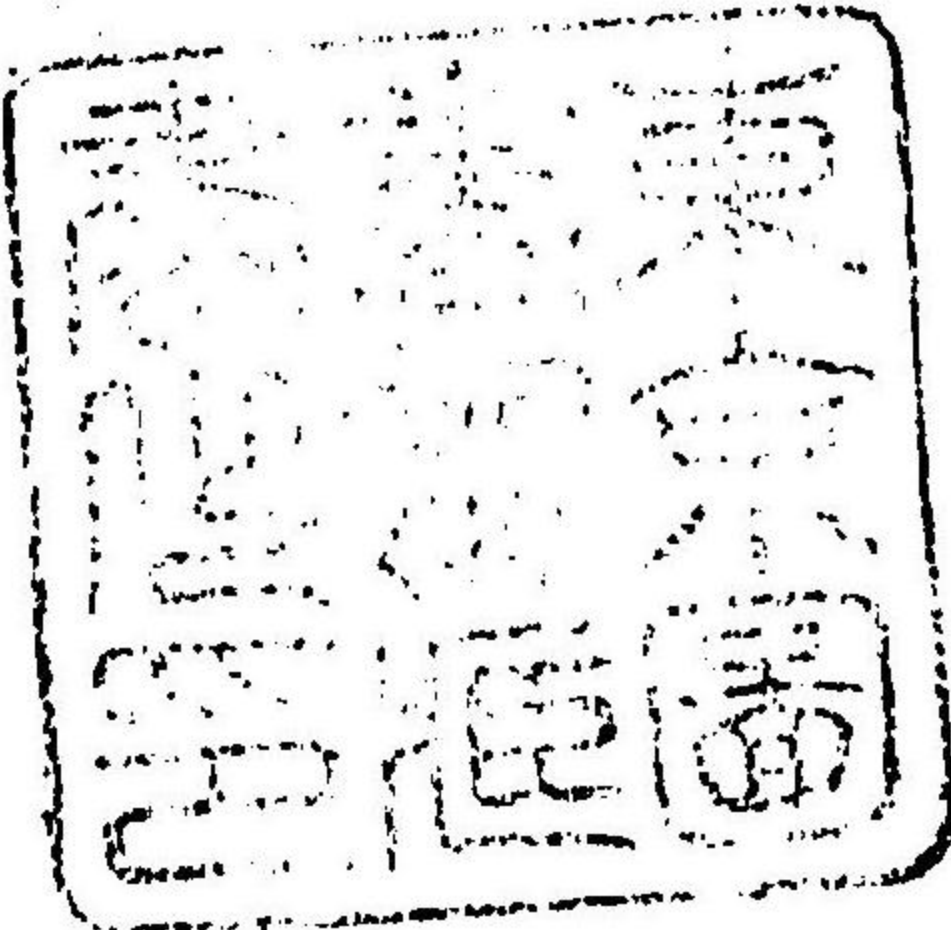


田賴
中書

賢所祭神考証



館書圖京東				
一	二	三	四	五
冊	號	架	函	類門



寶
珠

雷興

陵

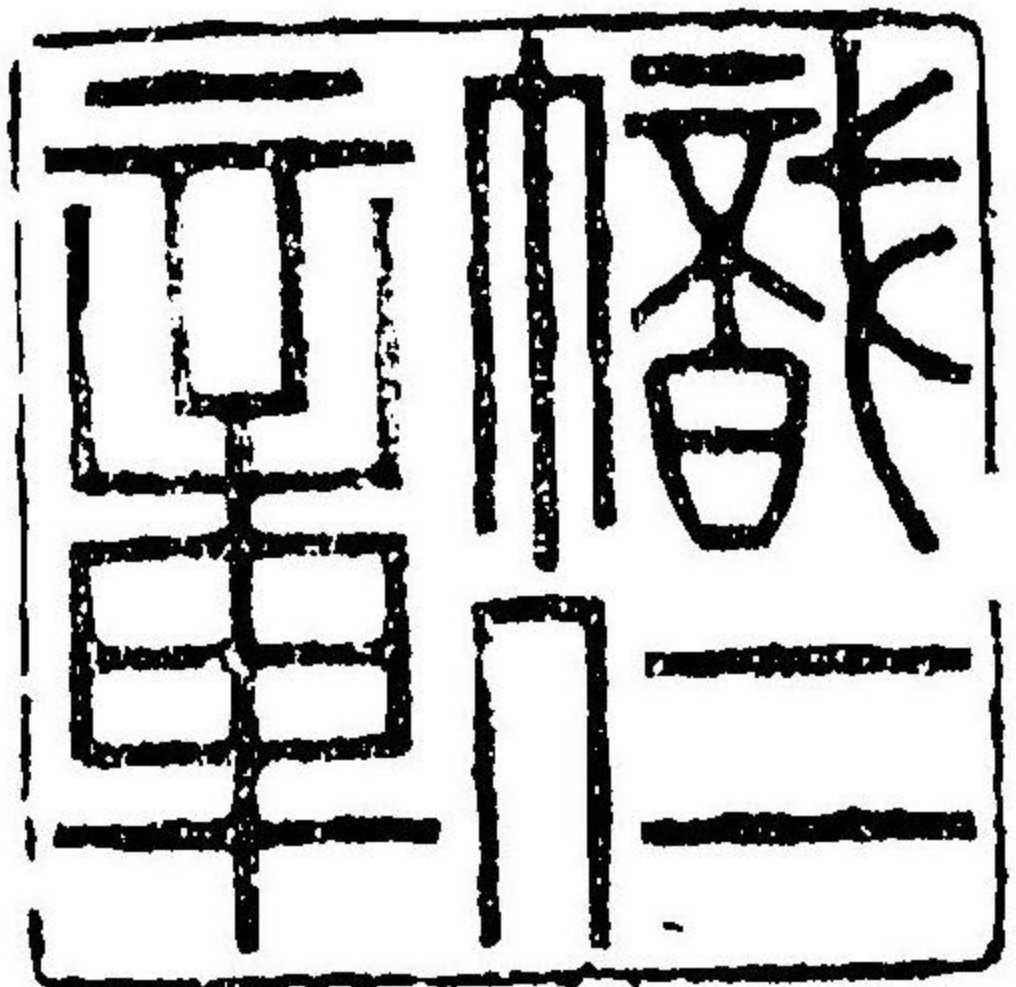
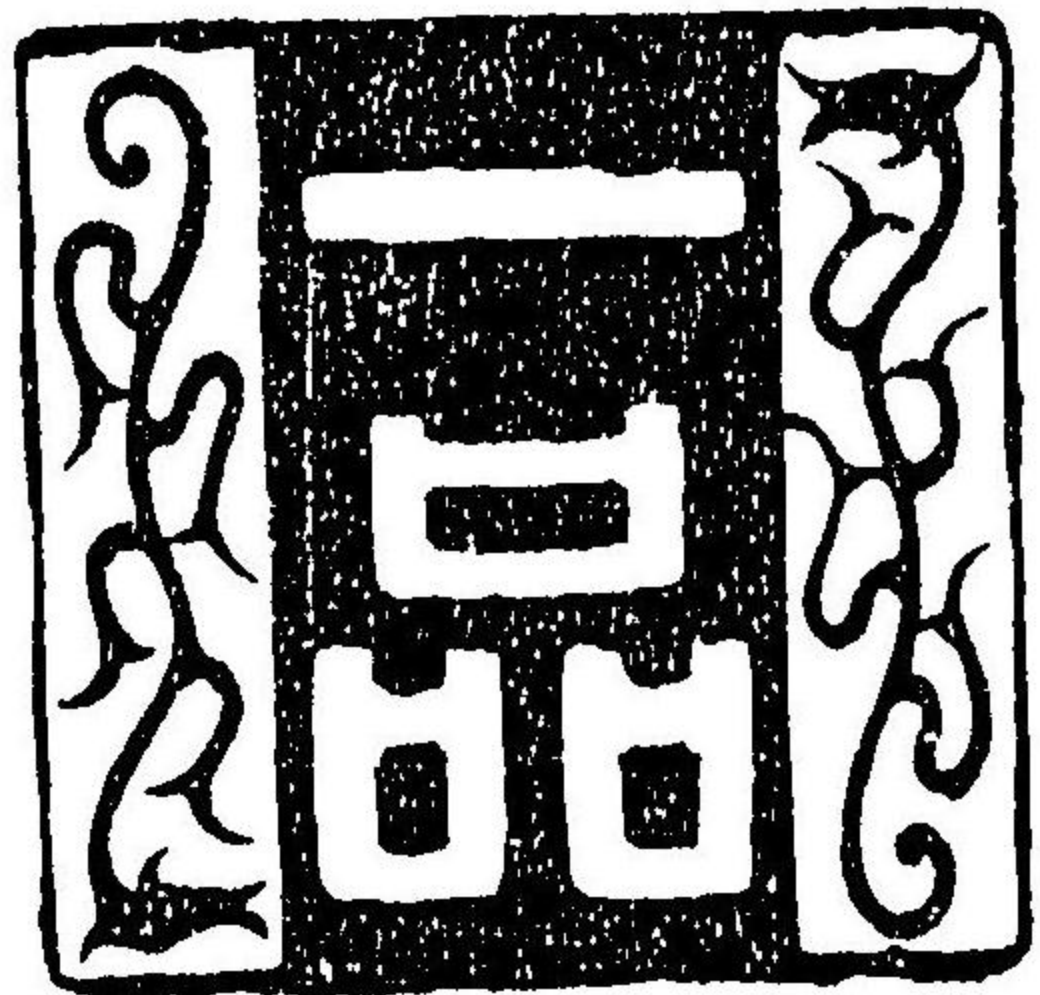
天

壤

烟

窮

一西條仁親王



賢所祭神考証

高むある日の御子と天津日繼をろくは天
 皇の歴世をひ祀來る賢所の神鏡ハ挂飾と
 り畏き天照大御神の御靈に坐ことは我教の
 職み知ざる人やある。殊さらは説明まで
 りゆらばせど。遠き鄙を。然らば。さるまぢみ便
 よき書も少ければ。今新小定給へ於祭神の縁
 由よ暗くて。勅の旨を悟らばらぬを。飽ず口
 惜み。まといふは斜にらむ。予うひく。た學
 ふ。いゆせど。建曆の聖記を世に著明を。であき

書ふとぞ。賢所の條此れを摘了。採れど
えるべがてらふ。神典皇史をバ更りもははべ。
官記家牒の類了至るまで。かき引出た徴と
し。道よふどらむ榮とて。寶鏡の光まば。天壤
を共に明りせほや。き心まらびみぬむ。

神宮官司大教正田中頼庸謹識

賢所

賢所を。村上天皇聖記扶桑略記等小威所も作
て。御堂關白記に尊所。小右記ふ恐所。中右記ふ
畏所。日本紀略了賢所も作る。賢ハ借字よて。言

此意ハ畏字小ちか。

凡禁中作法先神事。後他事。且暮敬神之獻慮無懈
怠。白地以神宮并内侍所。方不爲御跡。

禁中作法先神事と書はし。ハ。天皇の知食を
萬機此中小。第一小神事を先了給ふとふて。
神事やハ佗な。皇祖天照大御神小仕奉りて。
天職を盡給ふれみ。古事記小曰。天照大御神高
木神之命以。科詔日子番能。邇邇藝命。此豐葦原
水穂國者。汝將。知國言依賜。故隨命以可天降。於
是。副賜其遠岐。斯八尺勾瓊鏡及草那藝劍而。詔
者。此之鏡者。專爲我御魂而。如拜吾前伊都伎奉。

日本紀曰。天照大神手持寶鏡。授天忍穗耳尊。祝之曰。吾兒視此寶鏡。當猶視吾。可與同床共殿。以爲齋鏡。こほぞ賢所を齋祀給ふ本原なり。誠小古よて今も至まで。天皇比暫も離れ給ふはトキハ此道なり。谷重遠云。爲齋鏡謂爲神體。即今内侍所此遺法也。又曰天照大神之所手授。天忍穗耳尊之所親受。乃當視吾之齋鏡。而萬世繼體。當同牀共殿。以羹墻乃祖者。此君々相傳之密旨也。神道王道之親切。至矣盡矣。日本紀評註曰。此神勅神道之一大條貫。足以蔽神道之大。至矣盡矣。更復何求。擴充之。則異域之墳典猶一浮漚。

之於大溟而已。神明之冥慮。雖不可窺測。視此神勅。則如大陽麗乎天。讀此書者。敢不快活乎。同床共殿者。何也。是神皇一般之本致。以之鎮護皇基。所以爲齋鏡也。而今鎮座于我神宮。照臨皇統。寶祚無窮之誓約。豈其虛哉。白地ハ乍也。神宮を皇大神宮を謂給へて。古今うち任せて。神宮やいふも。伊勢小限並る物ぞ。内侍所も。即ち賢所なり。源氏物語岷江入楚小。内侍所ハ賢所とも申奉る。内侍所とも。神鏡の坐すを御殿了は。必内侍官の侍ふふて。内侍所と稱奉る由ハ。白河天皇の仰了。内侍所神鏡。昔飛上欲上天。女官懸

唐衣袖奉引留。依此因縁。女官所奉守護也。江次第小記せるが如し。古語拾遺了。逮于神武天皇。建都橿原。經營帝宅。天富命捧持天璽鏡劍奉安正殿。當此之時。帝之與神。其際未遠。同殿共床。以此爲常。至于磯城瑞籬朝。漸畏神威。同殿不安。故更令齋部氏率石凝姥神裔。天目一箇神裔。二氏更鑄鏡造劍。以爲護身御璽。是今踐祚之日。所獻神璽鏡劍也。正統記云。内侍所を神鏡あり。八咫鏡と申は正體は。皇大神宮小いそひ奉る。内侍所に坐ます。崇神の御世に鑄替らしたる。大御鏡あり。坂士佛云。此神鏡を本体をてり。大

倭國宇陀郡宇陀神戶小了。重了鑄りはし給む。御鏡ハ。内裡にわたりまひ。内侍所より了。年中行事秘抄に。天慶元年七月十三日。今夜戊剋。内侍所自温明殿遷御清涼殿。齋辛櫃二合。注小。自往古號之神明。在内侍所。相傳云。伊世大神宮分身也。每事靈驗也。右の書等小依む。内侍所も。齋鏡の御摸造ふ。天照大御神の御靈了。坐ことと知べし。皇大神宮雜例集云。内侍所者。神鏡也。天曆聖記小。温明殿所納之神靈鏡。日本紀略小。威所神鏡。扶桑略記に。温明殿神靈鏡。御堂關白記了。御内侍所神鏡。其他諸家の記録

うも。内侍所とい。神鏡を指して申さなり。一代
要記小。天徳災に。内侍所飛出温明殿。中右記小。
内侍所自飛付給。永暦元年皇大神官宣命小。被
掠取内侍所。東鑑欲開賢所。又曰。賢所。神靈御入
洛。平家物語内侍所入洛の篇小。内侍所神靈比
御筈など記し。其他近古此書りも。皆全トけし
ど。古今うち任せて内侍所とい。齋鏡の御摸ま
指奉れるとと明けし。御跡ハ。紀小。脚邊此云美
阿止部。字鏡に。蹄跡也。足乃宇良。又阿止とある
の如し。天皇比乍よも。神宮并内侍所の方を御
脚として。御寢まさぬも。孝敬の極なり。下る下

までも。此心得ありふべきことふまそ。

萬物隨出來。必先置臺盤所。棚召女官被奉。或内侍
參奉之。近代者如内侍。不候内侍所。上古者。以温明
殿爲司云々。

萬物マンブツ也ハ。萬物マンブツの早物ハヤモノなり。儀式帳サキに。先總サキホトと
るも。初總ハツホトと同義トウギして。元ハジメに稻イネよて出イし詞コトある
を。今イマも萬マンの早物ハヤモノをいへり。祈年祝詞イノネイノミコトに。皇神スメノカミ
能見ミ。齋坐イハサマ四方ヨナカタ國者クニノミヤコ。天アメ能立タツ極タマシ。國クニ能退ヒク立タツ限カヘ。云
云。狹國ササキクニ者ハ。廣ヒロクニ。峻國サカキクニ者ハ。平ヒラ。遠國トホクニ者ハ。八十ヤソ綱ツナ打ウチ掛ケ
引ヒキ寄ヨシ如ゴトク事コト。皇大神スメノオホカミ能寄奉ヨシマツラフ者ハ。荷前ノサキ者ハ。皇大神スメノオホカミ
能大前オホサキ。如ゴトク横山ヨコヤマ打積ウチツクミ置オキ。殘ノコリ。平ヒラ。間看マミヤミと

あるも。此旨小して。真に愛き詔なす。鈴木
重胤曰。天下の人民も。皇孫小萬物の初物を貢
て。皇孫ハそを皇大神了奉らせ。其残をば。
己命の聞食を義して。萬物隨出來。必先被奉之
とあるハ。此旨を發表し給へるあり。温明殿も
宮殿此名。和名抄小。温明殿。在綾綺殿。東と見え
る。坂士佛云。崇神天皇の御宇。別其御殿を立
て。崇め奉侍る。温明殿もさふ。岷江入楚小温
明殿も。神鏡はトえて。別殿了坐まり時の御殿
と見ゆ。内侍所やも賢所とも申奉るなどあり
る如し。

自神代爲神鏡。如神宮奉仰。爲伊勢御代宮。被留置
也。神事次第同伊勢。今谷川本小代。下又爲字を脱せり。
作ハ是ふらむ。今寶石類書
小所引再據て。此は正也。

自神代爲神鏡とハ。八咫鏡を指給へ。日本紀
了。天照大神乃賜天津彦彦火瓊瓊尊。八坂瓊
曲玉。及八咫鏡。天叢雲劍。三種寶物。曰。豐葦原千
五百秋之瑞穂國。是吾子孫可主之地也。爾皇孫
可就而治焉。行矣。寶祚之隆。當與天壤無窮矣。大
倭本紀云。天皇之始。天降之時。其副護齋鏡三面。
子鈴一合也。註。一鏡者。天照大神之御靈。名天懸
大神。今伊勢國磯宮崇敬拜祭大神也。日前國懸

兩大神縁起小引。當宮本記天係大神者。天照大神之御靈。伊勢磯宮所座崇敬并祭也。とある是なり。伊勢御代宮とも。賢所ハ皇大神宮の御代として。宮中小留置給ふとあり。上り謂る伊勢大神宮の分身ふきば。御代の義なり。清原宣賢曰。天子毎日御行水ありて。御并あり。天子御指合の時ハ。神祇伯御代官小并あるなり。神事次第同伊勢とハ。賢所も。伊勢の神形を摸せざる故小。祭祀の禮も皇大神宮小同トとなり。鈴木重胤曰。朝廷と神宮と別きたる後も。猶神事此同きハ其本一ふふる故なり。かれ朝廷の祭

を。皇大神同殿の遺制ありて。神宮は祭ハ。朝廷は古式の傳ハれるなり。かく心を留て比較ふに。天上は儀を高千穂宮より移依せけむを。朝廷神宮共小職掌の變革ありて。彼此別あるが如くふきども。其源よて推時ち。少も神代は盛典を失ハバとあるは。能く此意旨小合へる説なり。か。

世始同殿御坐之閉。主上朝夕不放御本鳥。仍冠巾子融緒被結御冠穴此故也。

世始同殿とハ。皇祖彦火瓊々藝尊よて稚日本根子彦太日々天皇開小至るまで。視吾の神勅

み任^ニ。同床共殿に御坐^{オシマ}し、時を詔^{ウケ}ふなり。神代紀評記小。天祖以還。至于開化天皇。同床共殿。神物官物無分別矣。崇神天皇漸長神威。共住不安。故祭於倭笠縫邑也。開化天皇以往。神慮皇情冥相契合。閑不容髮。及于崇神天皇。畏其神勢。是情欲萌動也。此情動也。自隔神皇之際。所以祭于別殿也。とひへ。真よ開化天皇以前の形勢ハ。茲に記給むし如く有けむる。御本鳥ハ。髻ふ。日本紀和名抄竝に毛止々利と訓。髮の本取と云所あり。冠も。字鏡小褻頭。幞頭。竝小加々不利須や訓。和名抄小。幞頭の訓加宇布利と

あり。伊邪那岐神大國主神の御冠も。古事記出雲風土記にも見た。其制去る今と異なるべし。古よ其物あり証ハ。此御記小考合し。ぞ知べあり。巾子も。字鏡小。斤自。和名抄了辨色立成巾子。此間巾。催馬樂に古志とあり。昔より巾之單音に唱ふ。谷川氏曰。巾子も。冠の豎小高き所。髻を入る。を謂ふ。皇大神宮雜例集。或記曰。内侍所者。神鏡也。與主上本御同殿。故院被仰云。帝王冠。巾子。左右有穴。是内侍所御同殿之時。主上夜不能放冠給。御眠之時。御冠屢落。仍以挿頭花。自巾子穴通御髮也。あり

も。同傳と聞えた。

垂仁天皇御宇。始為別殿。御温明殿。白河院。仰曰。内侍所。神鏡。飛出欲上天。而女官懸唐衣袖。奉引留。依此因緣。女官奉守護。云々。院の下小御宇の二字は。御文より。禁秘抄階

梯寶石類書の
本は依て別る。

藤原公麗曰。垂仁も。崇神も作るべし。但これハ。江次第より垂仁天皇世。始御別殿。とある小據也。書給へる小や。今案ず。天照大御神を倭笠縫邑小遷給ふも。日本紀小據。崇神天皇は六年なと。内侍所の御上も推量つべし。本朝事始小。崇神六年己丑。始制温明殿。以三種之神器。安置

此殿。後代之内侍所。以右之温明殿表始也。トスリ云々。蓋其實を得た。但三種の神器を安置す。云は誤なり。崇神天皇以後も。か其神靈ハ。猶上世の如く大御身を放ち給ハ。やるなり。古語拾遺。磯城瑞垣朝段小。倭笠縫邑。殊立磯城神籬。奉遷天照大神。及草薙劍。とある。以て天上の神物也。此玉は。御許に坐し。こと知る。信し。岷江入楚小。主上神鏡と別殿小大座まは。ことハ。崇神天皇よりのこと。拾遺に見ゆ。是正説を。とべし。と云へる。もさる言ふ。況て天徳以來。焼亡は度毎小曾て玉の議なし。此記寶劍神靈

の條より。神璽、自神代于今不替。壽永自海底求出。夜御殿御帳中、御枕二階上案。正統記より神璽ハ。八坂瓊の玉を申し。神代より今小かそらび代々此御身を放ち給もぬ御守あれば。海中よて浮出給も理あり。増鏡小。後醍醐天皇伯耆よて還御の段小。内裡へ入せ給ふべき義。重祚などより有べけきと。璽此箱を。御身より添られよきぞ。行幸の還行此式小同ト有べき由定らる。なり。百練抄小。天永五年。高陽院焼亡。天皇遷御小六條殿。或記曰。御持僧行尊取劍璽。入御輿。吉部秘訓小。文治六年。主上御元服。出御南

殿。内侍持劍璽。候前後。藏人頭左中將成經朝臣扶持御璽。右中將實明朝臣扶持御劍。神璽可爲前之由。有院宣。仍以御璽爲先。古今著聞集小。寛治八年。内裡焼亡。中御門右府よりそぎ御前へ参りて。神璽御劍の御箱ハ。持せ給小やらむと尋奉れば。自ら持たてや。勅答あり。永和元年大嘗會記小。乘御の時。大炊宰相中將冬宗劍此や。くさ勢む。左右内侍劍璽を持べきなり。但壽永小寶劍西海より沈み。後。暫璽を。るを。行幸の時持せらした。彼例より準じて。御劍ばかり。浅具せられた。なり。其他平戸記。中務内侍日記等の

諸書小。考合せても。中昔ハ。神鏡や劍璽も。同所に坐まはぬこと推して知べし。温明殿ハ。後其名を前小廻して書せ給へり。白河院よる守護に至る候で。三十餘字も。江次第の全文を取せ給へり。

天德燒亡。飛懸南殿櫻。小野宮大臣請袖也。

天德燒亡とハ。日本紀略云。天德四年九月廿三日庚申。今夜亥三刻。内裡燒亡。累代珍寶。多以燒失。と云。是ふり。神鏡の飛出給ふこと。江次第ハ。天德燒亡。飛出着南殿櫻。小野宮大臣稱警蹕神鏡下入其袖。と云。文み基きて。書給ふ

ふり。南殿ハ。紫宸殿なり。藤原公麗云。延喜式。凡御座者。紫宸殿設黒柿木倚子。編年記。延喜中令小野道風改書南殿賢臣像。と見ゆるが如し。櫻も。草木條小。櫻。在紫宸殿巽角。是大略自草創樹歟。と記し給へり。小野宮大臣も。實賴公なり。清慎公と號す。撰集抄小。天德の事を記して。清慎公參らせ給ひて。内侍所をてに燒させわをしましぬらむとおがし歎きける小。南殿の櫻の梢小か。らせ給へり。光赫奕としてありまふ坐しを。山の端まけ出る日よても猶あらたふり。はほそり奉るを拜奉り。はそぎ右の

御膝を比げ。左は御袂をむろげ。昔天照大神百王をよみて奉むと云ふ御誓ひまそかまけり。其御誓ひらたまらずハ。實頼の袖小移らせ給へと申給へる。小神鏡たちまぢる袂を飛ひらせ給へまけり。自みさたをほひらせ給ひて。大政官の賢所に渡奉てよまへり。其他一代要記。皇大神宮雜例集。帝王編年記。源平盛衰記等。文ハ詳略はまどし。内侍所飛出て。南殿の櫻を懸給ひ。小野宮の袖小入らせ給ふ。去やえ違ひ。内侍所も。皇大神宮の御摸あれど。靈驗の著きまそ理なま。皇大神宮ハ。寶龜十年八月五日の災

り。御正體竝左右相殿御體。猛火の中よて飛出給ひて。松樹の上小懸らせ給ひ。延暦十年八月五日の災小も。亦飛出給ひて。黒山の頂より光明を放ちて。懸給ひること雜事記に載るれど。内侍所も何怪むべき。村上天皇聖記云。天徳四年九月二十四日。鑿求温明殿所納神靈鏡。竝大刀契等。申時重光朝臣來申云。瓦上在鏡一面。其鏡徑八寸許。頭雖有小瑕。專無損圓規竝帶等。甚以分明。見之者。無不驚感。外記曰。威所三所。一所齋鏡。件御鏡。雖有猛火上。而不偏損。即云伊勢御神一所。鏡真形無破損。長六寸許也。一所鏡云々。紀

伊國御神。小右記云。鏡三面中。伊勢國御神。紀伊國日前國懸神。其他扶桑略記。日本紀略の載たるも。神鏡三面と聞えども。其中以大御神の御ハ。正體小坐て。日前國懸大神の御也。相殿よ也。其証ハ。小右記云。寛弘二年十一月十五日。火自温明殿出。神鏡所懸太刀竝不能取出。十七日。神鏡趣竝相殿事等。先令勘諸道。やあれバ恐所トハ。即ち大御神を稱す。相殿や也。日前國懸の大神を稱すなり。其他相殿のことハ。醍醐地藏院古記裏書に。天徳燒亡記云。三面蓋相殿所祭也。三所一説。伊勢日前國懸御形代也。是三面の説

こそ非け也。相殿の坐とを違ハバ。吉記云。内侍所正體。自餘鏡とあるも亦是ふる也。日前國懸大神のことハ。日本紀曰。石凝姥命爲冶工。採天香山之金以作日矛。又全剥真名鹿之皮以作天羽鞆。用此奉造之神。是即紀國所坐。日前神也。古語拾遺曰。令石凝姥神鑄日像之鏡。初度所鑄少不合意。是紀伊國日前神也。大倭本紀云。天皇之始。天降來之時。共副護齋鏡三面。注一鏡者。天照大神之前御靈名國懸大神。今紀伊國名草宮崇敬拜祭大神也。日前國懸大雙紙小我氏神降臨の時代を尋ぬとバ。天津彦火瓊々杵尊河

まくとぶてはしまひ時。二面の鏡を。同く宮中に
あづめいそひ奉る。崇神天皇五十一年四月八
日。天照大神日前大神當國まとの浦。名草比濱
の宮に移す。河底比岩上り御坐まき。五十四年
十一月十一日。天照大神を。他國へ移らせ給へ
ども。日前大神は。其儘留て給む。垂仁十六年。日
河底離す。今の社内ふ移らせ給ふ。日前國懸兩
大神縁起。國係大神者天照大神之前靈。紀伊
國名草宮所拜祭也。やあるふて。日前の本縁明
けし。

寛弘焼亡。始雖燒。無闕損。有諸道勘文。公卿勅使始

有宸筆宣命。于時殿中光耀。知御體不變。印本小寛弘を長徳

小訛る。今禁秘抄
階梯本小从小。

寛弘焼亡やを。一條天皇寛弘二年十一月十五
日の炎上ふて。江次第云。寛弘焼亡。始燒給。雖陰
圓規不缺。皇大神宮雜例集云。寛弘二年。燒亡。内
侍所。神鏡始燒給。雖然。圓規不闕。被立伊勢神宮
公卿勅使。使成卿行宸筆。宣命始於此。諸道勘文のこ
やハ。御堂關白記小。寛弘三年七月。召左大辨行
成朝臣。令讀勘文。先紀傳。次明經。次明法。次陰陽
道。とあるを。當時は事實ふてけらし。但神祇官
も。此中小あるべたを洩ふるふや。其証ハ。雜例

集に。卜筮吉凶、於神祇官陰陽寮之由。公卿會議之。各勘奏。雜事記小ハ。吉凶卜定神祇官陰陽寮。竝諸道博士などあり。了知せよ。殿中光耀云々。御堂關白記。十二月九日癸未。右府行諸社奉幣事。可奉置官司尊所。由申奉入新辛櫃。閉。奉置戸屋内。明光如耀鏡。日景在塗籠内。小右記云。神鏡昨奉移。但開舊御韓櫃持。奉納新辛櫃之。閉。忽然有如日光照耀。内侍女官等同見。神驗猶新。最是堪恐驚者。百練抄云。奉移神鏡於東三條。忽然有日光照耀。内侍女官等恐驚之。權記云。内侍所神鏡奉移東對。以新辛櫃。欲移入。閉。有照

耀。神威數驚感。とある。小思合了。當時其狀知べし。

長久燒亡。少納言經信欲奉出。火盛不合期。而有光入唐櫃。更不燒。云々。

長久ハ後朱雀天皇の年號あり。内裡炎上。元年九月九日小あり。神皇正統記云。長久年中火あり。灰焼の中より光を指せ給ひけるを。納てぞ崇奉られけり。

自一條院御時十二月。有御神樂。但多隔年行之。近代每年有之。云々。

神樂ハ。体源抄小。長久燒亡より始ると記せし

ど。寛弘の炎上其始ふるハ。今かく書給へるに
了明ふり。江次第説も亦是小全ト。公麗云。後朱
雀長曆比。每年被_レ行之。と春記愚葉記に見えふ
り。自_レ白河院御時。毎年行_レる。こぞハ。中右記年
中行事秘抄小見えふり。白河院承保年中よて
以後ハ。毎歳み行_レる。歟。

又有臨時御神樂例。壽永大亂之時。御西海。經三年
還御之時。有三夜神樂。是別例也。

三夜御神樂ハ。百練抄小。永曆元年四月十九日。
内侍所神鏡奉納新造辛櫃。去年十二月。信賴卿
亂逆之閉。師仲卿破御唐櫃。奉取御體於桂邊。造

假御唐櫃奉納。自師仲卿姉小路東洞院家所還
御温明殿也。自今夜三箇夜御神樂。と見えたり。
源平盛衰記も亦全ト。壽永大亂ハ。内大臣平宗
盛一族と共に小安德天皇を率奉_レて。西海に航_レし。
壇浦の敗_レり。帝を海に沈み給ひ。平族悉滅びし
時なり。東鑑に。元曆二年三月。於長門壇浦源平
相逢。軍士亂入御船。欲奉_レ開賢所。两眼忽暗。心惘
然。平大納言制止之。彼等退去。平家物語云。大納
言佐局ハ。内侍所の御唐櫃を取_レて。海小入むと
し給ひける。袴み裾を舩小射付_レられた。蹴纏
ひ倒給ひけるを。武士共取留奉_レる。其後御辛櫃

の鎖を捏截了。御蓋を既小開むとす。忽了目く
坐をる可。ゆきハ如何よ内侍所小て渡せ給小
ぞ。凡夫を見奉らぬことぞや宣へバ。兵共舌之
振了恐怖く。其後判官時忠卿小申して。元の如
く緘納奉らる。玉海云。文治元年四月。神鏡神璽
御入洛。平家物語小。内侍所忘る一の御箱。鳥羽
小著せ給小と聞え一かバ。内裡よて御迎小參
らせ給小。其夜子刻よ内侍所忘る一み御筥大
政官廳に入せ御坐を。寶劍ハ失ひけ了。神璽ハ
海上よて浮び玉むる了。片岡經春取上奉了

より。源平盛衰記も亦全ト狀小記せり。神璽の
筥を忘る一の箱と稱奉る了とハ。紫式部日記。
中務内侍日記。盛衰記。増鏡等。其他の書了出る
るの如し。

賢所習不押齋文。有瑞相鳴動光。堀河院御時。寛治
八年比。度々有此事。天德焼亡之時。又鳴云々。

神鏡鳴動のことと。小右記云。寛仁二年閏四月
廿五日。先日大外記文義朝臣云。内侍所神鏡鳴。
御占曰。可令慎火事者。行幸以後。内女房等裏雜
物稱。可有火事。通夜不寢。極不冝事也。中右記云。
寛治八年十月廿四日。堀河院焼亡後。聞内侍所

博士命婦語云。去夜有夢恐。又件夜内侍所鈴大
鳴。成奇之處已。皇居燒亡。是其徵歟。誠雖末代。可
恐者。神道也。十一月廿三日。於所有御卜。近日内
侍所頻令鳴給。怪異者。此時神鏡の飛出給ふこ
とも。同記小見ふて。其文み俊頼向内侍所。早奉
取出。自飛付給。やゐるふて。畏き御稜威のちど
推量つべし。又吉記りも安元の燒亡よ。四月廿
七日。内侍所神鏡鳴。其音如雷。廿八日又鳴動。其
日火出。とあまバ。天徳の災り鳴給ひしこと疑
ふべし。非か。

賢所御衣上古被奉。自中古絶。周防内侍曰。女御裝

束也。但夏生綯。冬只練綯被奉也。從二位親子私奉
美麗女裝束也。

上古小御衣を奉られしを。皇大神宮の御裝束
に據て推量る。必此聖説の如くあるべし。周
防内侍ハ。周防守繼仲女。後冷泉院女房かると
公麗云。女御裝束とハ。大神宮儀式帳。延喜大
神宮式小。小文紫御衣。小文紺御衣。帛御衣。帛單
御裳。羅御裳。帛御練等ありて。何れも姫神の御
裝束り坐バ。内侍所の御裝束さし有べくかむ。
親子も。大舍人頭親國朝臣女。修理大夫顯季卿
女。白河天皇御乳母と。公麗の説ふ。比れバ此

女裝束を奉る、小就ても賢所の大神ハ。天照大御神小坐をよと思ひ半小過べし。正統記小三種の神器共ことハ。所々に申侍てしかど先内侍所ハ。神鏡あり。八咫の鏡と申し正體ハ。皇大神宮に齋奉る。内侍所ふはしませハ。崇神の御代小のへらまし御鏡あり。村上の御時。火事に逢給ふ。後朱雀の御時。重て火ありて。灰燼の中よて光をさ、せ給ひけるを。納てぞあり。萬代の宗廟小まじ。寶劍も正體ハ。天の叢雲の劍後小草薙と申し。熱田比神宮小齋奉る。西海

沉しハ。崇神の御代も同しく作替られし劍あり。失ぬるまとい。末世の驗みやと。憾めしけれや。熱田の神ありある御事あり。昔新羅國より道行といふ法師來て。竊み奉りしかど。神變をあらはして。我國を出給を。彼兩種ハ。正體昔小變坐まさび。代々天の遠き御守とて。國土のありきたり光やなて給へて。神璽も。入坂瓊の曲玉と申し。神代よて今小かそらま。代共御身を離せぬ御守ふれば。海中よて浮出給へるも理あり。三種の御事はよく心得奉るべきありなべて物知らぬまどひハ。上古の神

鏡も。天徳長久の災よ阿ひ。草薙の寶劍も。海も
沈みけりと申傳ふこや侍るふや。返さるへは
もむご事かて。此國ハ。三種の正體を以て。眼目
や。福田とすることなれば。日月の天よ阿ら
む程も。一も欠給ふまよきか。天照大神の勅
も。寶祚の隆まさむこと。天地と窮ぬるべ
や侍まむ。争でか疑ひ奉るべき。今より往ナカ前サキも
最ト頼もしくおそ思給へれや記さまは。眞
萬古不易の確言かてあり。今謹て卷末小録
て。群蒙を開くべき斷案とまるとおもむ。讀者な
粗小看過一我。

木邨嘉平刻

明治十四年五月十六日版權免許

定價貳拾五錢

編輯兼出版人

鹿兒嶋縣士族

田中賴庸

東京府下麻布區
澁谷下廣尾町
三十五番地寄留

6
192

